

死に^レ戻りの神子は災禍の王の溺愛を知らない

離原

霄琳を助けた謎の青年。
美しい容姿を持ち、
何かと霄琳を気に掛ける。
霄琳の身の上についても
何か知っている様子だが……

白霄琳

本作の主人公。記憶喪失の中、
自分を助けてくれた
離原と旅をすることになる。
手の甲に不思議な模様がある。

神子 災王 皇孫

落ちた、と思った。それほどの衝撃だった。

けれどすぐに違ふとわかったのは、見開いた視界に天井が映ったからだ。屋根がないのか板の間からは月明かりが漏れているが、人一人が突き抜けたほどの大穴はなかった。

痛いほどに胸が鼓動している。夢を見ていた気がするが、思い出せない。

(誰かが呼んだ……)

悲痛な声で、誰かに呼ばれていた。それだけは覚えているが、それ以上は頭の中に立ち込める霧がすべてを隠してしまつて、名前はおろか、姿さえはつきりとした像を結んでくれなかった。

額に浮いた冷汗を手の甲で拭いながら、天井の隙間から見える月明かりに目を細める。鼓動につられて荒いままの息を整えようと深呼吸した時だった。

ガタガタと戸が引かれるなり、ぬっと人影が入ってきて、月明かりの中に浮かび上がった。

夜闇に溶け込むように全身が黒尽くめのその人物は、目以外を黒い布で覆っている。視線が合うと、びくりと体の動きを止めた。

「まさか、目が覚めたのか？」

登場人物紹介

滑りの悪い戸を後ろ手で閉めながら、長身の影が唸るように言う。どうやら成人した男のようだ。男が足を踏み出すと床板が悲鳴のような軋みを上げるものだから、怖ろしさが増す。思わず開いた口が震えた。

「な、なんだよ、あんた誰だっ」

「……」

男が動きを止める。ギシッと音を立てた床は今にも割れそうだ。壁のように立ちはだかる男の口元がまた動いた。

「……お前、名は」

「俺？ ……俺は白霄琳^{はくしょうりん}だけど……」

するりと名前が口について出たとたん、雷が落ちたかと思うほどの音が目をつんざいた。見れば、ついさっき男が入ってきたばかりの扉が破られ、何者かが押し入ってきたところだった。

「くそが……っ！」

驚く間もなく黒尽くめの男が霄琳を抱え込むなり、あろうことか体当たりをして小屋の壁を突き破った。

男は放たれた矢のように駆けていく。誰かと鉢合わせをしたらと霄琳はひやひやしたが、酒樓の灯りも見当たらないような小さな集落の路地はひっそりと静まり返り、誰かが出てくる様子もない。それだけが幸이었다った。

がくがくと揺さぶられる霄琳は必死でしがみつきのながら、男の肩越しに背後を見た。

追手は離れることなく霄琳と黒尽くめの男を追いかけてきていた。こちらともんでもない速さで走っており、その距離は次第に縮まっているように思えた。

「待て！」

追手の叫び声と同時に、霄琳は目を見開いた。走っているだけでも落ちそうで怖かったのに、霄琳を抱えた男が腰に帯びていた剣を放るなり、それに足をかけて飛び乗ったからだ。

急速に地面が遠ざかり、追ってきた男の姿も小さくなる。跳躍したのではなく、空を飛んでいる。霄琳は一瞬で自分の血の気が引いたのを感じた。

「た——助けて！」

自分を抱えた男の思惑も、追手の狙いも霄琳にはわからない。ただただ剣という細い足場に立った男に抱えられて飛ぶのが怖い。無我夢中できに手を伸ばすと、地面から同じように剣に乗って飛び上がった追手の手が唐突に迫った。

「うあっ」

伸ばした手を大きな手のひらが掴みかけたが、あわてたように黒尽くめの男が軌道を変えて更に上昇する。指先が一瞬触れ合っただけで、追手と霄琳の距離は開いた。

このままではどこかへ連れて行かれる。離れてしまう。

（いやだ！）

ざっと体中が総毛立った瞬間、霄琳はじたばたともがいた。黒尽くめの男は舌打ちをして騒ぐなと怒鳴ってきたが、それよりも追手の男と距離が開くのが怖くてたまらない。

「うう……っ！」

暗闇の向こうに手を伸ばす。すると一瞬、霄琳たちと同じように空を飛んで追いかけてくる男の手元が光った。あつと思った時には、闇を裂くように銀色の刃がまっすぐに飛んできて、霄琳を抱えた男の脛のあたりをザツとえぐった。

「ぐあっ」

とたんに肩に担ぎ上げられている霄琳ごと、黒尽くめの男が大きく揺らぐ。どうにか持ち直そうとしたようだったが、もう遅かった。

勢いそのままに、霄琳は夜の空に投げ出された。

落ちていく。今度こそ落ちていく。

ふわりと浮いた霄琳の手の甲に、淡い光が見える。それが何かわからないまま、霄琳は風を切る音を響かせながら猛然と飛んできた追手を見上げた。

（あ、傷……）

追手が頭からかぶっていた布が、激しい風に浮かれて後ろに流れている。そこから現れた、横に大きな傷跡の残る顔。怖ろしさは感じず、なぜだかほっとした。

しかしその安堵もつかの間だった。腕を掴んで引き寄せられたあと、ぐっと抱きしめられた霄琳の意識は、息つく間もなく夜よりも深い闇に覆い尽くされた。

その閉ざされた白い瞼を、風を切って進む男がどこか痛みをこらえるような顔をして見つめたことなど知らないまま。



どうぞ、と差し出された花は何輪目だっただろう。

わずかに揺れる輿の中から外を覗いていた霄琳は、笑顔で小さな手から花を受け取った。

「ありがとう」

お礼を言うと、花をくれた子にはにかんで駆けていく。近くで待っていたらしい母親と一緒に手を振ってくるから、思わずこちらでも微笑んで手を振った。

「腰は痛まないか」

声をかけられたが、霄琳はそちらに向かないまま、うんと頷いた。初めて訪れた大都市の風景に夢中だった。

街中が活気に溢れている。人々の声は高く空に響き、ひしめく店はどこも盛況だ。

窓から見える景色はもちろん、もらった花々の芳香が心を浮き立たせる。匂いをかいだたん、ふわりと吹き上がった風に煽られた。目を開くと、気付けば花園の中にいた。

手入れされた花たちの中に立ち尽くす霄琳は、顔をあげた。

花園の向こう、まるで鏡のように晴天を映す水面の真ん中に、小さな四阿^{あずま}がある。その中に立つ

人影に呼ばれたのだ。

「霄琳」

彼が呼んでいる。行かなければ。

嬉しくなって駆け出そうとしたとたん、足元が抜けた。

とっさに伸ばした手が空をかく。今にも大粒の雨を降らせそうな曇天を見上げながら、霄琳は落ちた。

背中を突き上げるような衝撃があつて、霄琳は真つ暗な中に転がった。すると、ぱたぱたと頬に雫が降ってきた。

（雨……違う。これは……涙）

誰かが霄琳を呼んでいる。悲しみと苦痛、深い絶望をにじませた慟哭が霄琳を呼んでいる。

こたえなければと、霄琳は口を開いた。

「――」

声が出ない。

でも、呼びたい名前がある。それは――……

「りげん……」

ふっと目を覚ました霄琳は、伸びた手の先に梁の渡された天井を見た。

天井の茶色い木目から浮き上がるような白い右手。ほっそりとした白枝のようなそれは己のものとは思えないが、腕は確かに自分の肩からまっすぐに伸びている。

しかし、やはり見覚えのないものもある。手の甲では、楕円の先端が尖った、いわゆる紡錘形の銀色の紋様が光を放っていた。それはまるで植物の種子のように見えた。

「なにこれ……」

擦つてみても消えない。むしろ、見えていなかった左手にも同じものがあることに気が付いて、霄琳の頭には疑問が増えてしまった。

（これなに？ それに、これ……俺の手じゃない）

霄琳の手は年中鍛を振るい、籠を編み、弓を引くために傷つき続けた平民の手のはずだ。まるで貴族のように白いこの手は、どう見ても自分のものではない。

それなのに、ぎこちなく体を起こしてみても、腕も肘も手首も霄琳の思うように不自由なく動いた。

どういうことだと混乱している中、肩を滑ってさらりと落ちた髪に霄琳はさらにぎよつとした。

黒く染め抜いた絹糸のような細くつややかな髪。肩から前に落ちたそれを軽く引いてみた霄琳は、目を丸くした。

「俺の……？」

くんと引くと、首が傾ぐ。引っ張られている感覚もある。明らかに自分の頭から生えているもの

だ。けれど、やはりそれが自分ものだとは信じられなかった。

混乱に首をひねっている、不意に足音がした。顔をあげた霄琳は、そこで初めて、やけに整然とした一室にいることに気付いた。

生活感薄く、広くはない部屋の中には霄琳が体を起こしている寝台と同じものももう一台と、その足元の方に小さな卓子、それから二脚の椅子がある。民家というよりは宿屋だ。そして卓子のすぐ向こうに扉があって、足音はその前で止まった。

とたんに霄琳の脳裏に蘇ったのは、昨夜の出来事だ。廃屋で出会った黒尽くめの男に抱えられて空に舞い上がり、追ってきた男に助けを求めた。あのあと自分は落下して――

「あっ……」

ざっと鳥肌が立って、視界の焦点が歪む。

――扉の向こうから現れるのが、あの男だったら。

緊張に息をひそめた霄琳だったが、開かれた扉の向こうを見るなり、強張った肩から力が抜けたのを感じた。開いた扉から姿を現したのは、最初に霄琳をさらった方の黒尽くめの男ではなかった。（そうだ、追ってきた人が俺を受け止めてくれたんだって……）

風をも裂くような速度で飛んできて、落下する体を受け止めてくれた男。あまりの勢いに彼の顔を隠していた覆いが取れ、その下から現れた大きな傷を霄琳は覚えていた。

そして今、目の前で盆を持っている男の顔も傷も同じものだった。

「……目が覚めたか」

呆然とする霄琳の前を横切った男は持っていた盆を卓子に置き、卓子ごと霄琳の近くに引き寄せた。

「起きたならちようどいい。腹が減ってるだろう。いくつか買ってきた」

盆には布がかぶさっていたが、それが取り払われると饅頭が三つと野菜の浮いた汁物が現れた。

「まずは食べてくれ。それから聞きたいことがある」

霄琳も男に聞きたいことがあるが、混乱していて疑問さえまとまらない。そもそも男の素性はおろか、名前も知らない。

そんな相手から差し出されたものをやすやすと口にしているとは思えなかったが、蒸したての饅頭とやわらかな風味の汁物はいかにも美味しそうだし、腹も空いていた。

（命を狙ってるなら、俺が寝てる間に殺すこともできたはずだよね……）

気を失ったのは夜だったが、今は窓から陽光が差し込んでいる。一晩あれば、霄琳を手にかける機会などいくらでもあったはずだ。

きつと大丈夫だと自分に言い聞かせて、男が饅頭を一つ手に取ったのを皮切りに、霄琳も同じものを口ににする。互いに無言のまま食事は進み、やがて差し出された水を受け取った霄琳は、結局何も話さないまま食事に没頭してしまったことに気付いた。

「あの、ごちそうさまでした。お代は……」

「金はいいい。それより、聞きたいことがある。話をしてもいいか？」

「うん」

霄琳が頷くと、男は卓子を押しやって自分の椅子を寝台に寄せた。

距離が詰められたことで男の顔を改めて見た霄琳は、整っていると素直に思った。

筆でまっすぐに線を引いたような黒々とした眉の下には鋭い光を宿す双眸があり、鼻筋も通っている。ただ、右目の下から左に伸びた一条の傷跡が鼻梁を横断していて、その線は左の頬の高い位置まで続いていた。そのうえ口が真一文字に引き結ばれているせいもあって気難しそうにも粗暴そうにも見えだが、仕草や声に荒々しさはなく、むしろどこか老成したような落ち着きがあった。

「まず、名前を教えてくださいませんか」

「霄琳。白霄琳だよ」

名前は白霄琳だ。考えるまでもない。しかし次の質問に、霄琳の口は答えを失った。

「……わかった。ならば、白霄琳。出身はどこだ？」

「出身は……あれ、出身……？」

開いた窓からさつと風が吹く。冷たい風ではないのに背中がぞくつとして、霄琳は思わず両手を握り締めた。

自分の名前は白霄琳だ。出身は、家族は、生まれた日は……

「……」

頭の中に霧があるというよりは、まるきりすべてが抜け落ちていくかのようだ。

名前だけがはつきりとしているが、それ以外がわからない。そうすると唯一言える名前すら自分のものか怪しくなつて、霄琳は一気に心もなくなつた。

思い返せば、あのあばら屋で目覚めるより以前の記憶がない。唯一覚えているのは、夢で誰かに呼ばれていたこと。声は霄琳を呼んでいて、それは自分のことだと思つたのだ。

「俺は、白霄琳……」

なんとか声を絞り出す。それ以上何も言えなかつた。

男は呆然と呟いた霄琳をじつと見下ろしていたが、思い出せと詰め寄ったりはしなかつた。一つ嘆息すると、わかつたと頷いた。

「無理に思い出さなくていい。他に具合の悪いところはないか？」

「ない……でも、なんか変なんだ。俺、こんな手じゃなかつたし、髪もこんな風じゃなかつた。それに、これ……」

違和感の最たるものは、握り締めた手の甲に輝く銀の模様だ。いったいなんなのかと指先で少し強めに触れても消えることも崩れることもなく、当たり前のように肌と一緒に引き攣れた。

「これなに？ 呪い？」

一見して美しいものだが、得体が知れないものは恐ろしい。何かしらの悪いものではと不安に眉をひそめた霄琳に、男は首を振った。

「それは花鈿だ」

「花鈿？」

言われて、霄琳はまじまじと自分の手の甲を眺めた。それならば霄琳も知っている。いわゆる貴人と呼ばれるような人々が額や眉間に花や紋章を描く装飾だ。しかし花鈿は消えるもので、霄琳の

手の甲にあるものは擦っても消えない。

違うのではと思ったものの、男の話は続いた。

「俺もあの男……黒衣も、花鉤を宿す者を探していた」

「黒衣？」

「本名じゃない。俺がそう呼んでいるだけだ。ただ、お前が白霄琳であり、花鉤を持つ以上、あいつの狙いは一つ——お前の命だ」

「……」

告げられた言葉の鋭さに、霄琳は息を飲んだ。

さつき水をもらったばかりなのに、口も喉もからからに渴いていた。

ただ、どうしても聞かなければならないことがある。震えそうになる唇をゆっくりと開いた。

「じゃあ……お兄さんも、俺の命を狙ってる？」

この男のことを、霄琳は何も知らない。まだ、名前すらわからない。

けれど、双眸はそらされることなくまっすぐ霄琳を見つめていた。

「俺は離原。お前を生かすため、ここにいます」

二

離原と名乗った男に、霄琳は驚いた。夢で呼んだ名前と一緒にだった。

（もしかして俺が覚えていないだけ？）

もしそうなら知り合いだと言っただけそうなのだが、その素振りはない。同じ名前だけで違うのか、それとも何か理由があって霄琳にそれを告げずにいるのか。考えてもわからない。

結局霄琳は名前のことは一旦置いて、少なくとも彼が霄琳の命を狙っているわけではないということだけを受け止めた。

「それは……俺を守ってくれるってこと？」

生かすというならそういうことだろうと解釈した霄琳に、離原は頷いて見せた。

「そうだ。だから、これから周苑に向かおうと思っている。周苑はわかるか？」

「わからない……」

おそらく地名なのだろうが、まったく覚えがない。それどころか、ここがどこかもわかっていない。

霄琳が首を振ると、離原は懐から地図を取り出して広げた。とんと指さされたのは、山間の町だった。

「まず、ここが半胡^{はんこ}。今いる町だ。お前が目覚めた村から、二百里ほど離れている」
「二百里!？」

すっとんきような声が出た。二百里など、徒歩であれば三日か四日はかかる距離だ。そんなに遠くまで来たのかと驚く霄琳に、離原はこともなげに顎を引いた。

「そして、ここが周苑。この永玉国の国都だ。ここにお前を連れて行きたい」

半胡から長い指がすつと移動した先に、周苑はあった。目測でも、半胡からはそれこそ二百里どころか千里でも足りないほどの遠地だ。

「こんなに遠く……なんで周苑に行くの？」

思わず呟くと、離原はすまないと口をつた。

「黒衣から守るには一番適した場所なんだ。お前を匿える場所もある。協力者もいる。だから、周苑へ連れて行かせてほしい」

名前しか自分のことを知らない霄琳だ。記憶がないものだから頼れる相手もない。

今の霄琳が知っている他人は離原と黒衣だけで、離原は霄琳を生かすためにいると言ってくれた。それが本当かを確認するすべはないが、単衣に裸足で銭貨すら持っていない霄琳にできることは、ただ彼を信じることだけだ。

一緒に来てくれるかと聞く離原に頷くと、彼はほっとしたように目元を少しやわらげた。

「道中、できる限り不便がないようにする。なんでも言ってくれ」

そう言った離原は翌日、霄琳に靴を買ってくれた。

「り、離原さん。俺、あんまり高いのは買えない……」

今は手持ちがないが、あとで返すつもりだ。だからあまり高いものは困るのに、離原は宿を出てすぐのところにあつた靴屋の主人を捕まえると、あれやこれやと見るからに高価そうな靴を持ってきた。

霄琳としては履いて歩ければそれでいいのに、離原は霄琳が二度見したほどの金を払って、ふくらはぎの中ほどまでを隠す長靴と、足の甲が見えるような浅い布靴、それから靴下を三足買った。

「離原でいい。金も返す必要はない。周苑まで連れて行くのは俺の都合で、お前はそれに付き合ってくれるにすぎない。だから費用は俺が持つて当然だ」

そうは言っても宿代だって食事代だって、すべて離原が支払った。せめて感謝の言葉をと、思ひ、ありがとうと言うと、男は目を細めて少し笑った。

ようやく靴を得た霄琳を連れてさらに離原は町中を歩き回ると、霄琳の服を数着揃え、保存のきく餅もいくつか買った。

「他に必要なものはあるか？」

半胡を出る間際、そう聞かれた霄琳は少し迷って武器屋に寄ってもらった。

「剣がほしいんだけど、俺でも使えそうなのってあるかな」

これから向かう周苑は、千里以上も離れた先にある。その道程で何があるかわからないし、せめて自分の身を自分で守るすべを得たい。そう思って店中を見て回った霄琳が手にしたのは、小回りの利く小剣だった。

武器というよりは生活をするうえで使いやすい小刀に近いものだが、試しにと持たされた長剣や槍に比べればるかに扱いやすく、手になじんだ。

「それでいいのか」

「うん。いざという時に使えなかったら意味ないし」

そんな時は来てほしくないが、何もないよりはましだ。

そうして買ってもらった小剣を腰帯に差せば、もう旅支度は終わりだ。

ならば旅を急ごうとさっそく町を出た二人だったが、問題は即座に起きた。

霄琳が、剣に乗れなかったのだ。

平行に浮いた剣の上に立った離原に手を取られ、霄琳も一応は刃の上に足を乗せた。しかしそこまだった。

「ご、ごっ……ごめん、だめ、こわ、怖い……っ」

三尺ほど浮き上がったところで、霄琳は耐え切れずに悲鳴じみた声をあげた。両手で離原に抱きつき、恐怖から逃げるように胸に顔をうずめる。膝も震えて、立っているのがやっとだった。

夢で感じた落下の恐怖が、脳裏どころか体の芯にまで焼き付いているかのようだった。

怖がる霄琳を支えたまま剣を降下させた離原は、すぐに剣を鞘に戻した。

離原は何も言わなかったが、剣で飛ぶことができればよかったのは明白だ。目指す周苑は、徒歩で行くには遠すぎる。

呆然と考えこんでいた霄琳は、やがて一つの考えに至った。

「……ごめん、離原。こんなことを言うのは悪いんだけど……夜に飛刃で移動するのはどうかな。

俺すごく熟睡する方だし、その間に飛んでもらって、昼間は宿とかで離原が寝て休む。そしたらもっと早く着くと思う」

霄琳が落ち着くまで待つてくれていたらしい男は、提案を聞いてはくれたが、すぐに首を振った。

「いや、荷馬車を買おう」

名案だと思った霄琳の考えは、一瞬で却下された。

「一時的に飛刃を使うことはあるだろうが、それ以外は馬でいい」

そう言って店に向けて踵を返そうとするものだから、霄琳はあわてて離原の服の裾を掴んだ。

「馬なんて買わなくていいよ。大丈夫、寝てる時なら移動されても気付かない。なんなら眠り薬も飲む」

これが名案のはずだと信じる霄琳は言いつのつたが、離原は決して頷いてくれなかった。

「確かに飛刃での移動は早いが、利点は速度だけだ。お前の苦痛より優先すべきことではない」

「苦痛ってほどじゃ……」

ない、とは言えなかった。

怖さはある。ぐんとすべてを引き上げられるような浮遊感、そして落下の恐怖。考えるだけで血の気が引き、胸が早鐘を打ち始める。離原の裾を掴んだままの手も震え出した。

脳裏に蘇るのは、あの夢の記憶だ。

(なんで？ 夢なのに)

あれは眠りの中で見た幻のはずだ。それなのに、思い出だけで冷ややかな恐怖が這い上がってくる。

落ちるのは怖い。死の先には何もない。

（――怖い）

「霄琳」

泥濘ぬかるみの中を沈んでいくような意識を現実に取り上げたのは、離原の声だった。

はっとして瞬きをすると、顎から伝い落ちた雫がぱたと膝に落ちたところだった。

「あ、……あれ……？」

なぜ泣いているのかという疑問と、不意に増した恐怖が意識をかき乱す。けれどその中に飲み込まれる前に、伸びてきた腕が霄琳を抱き寄せた。

「霄琳。……俺がわかるか？」

大きな手のひらが震える背中を撫でてくれる。そうすると、強張った体から余計な力が抜けていくような気がした。

「わか……わか、る。離原……」

呼吸が苦しい。鼓動が早すぎてくらくらする。助けを求めるようにしがみつくと、離原はなんの躊躇ためらいもなく霄琳を抱きしめた。

本来の鼓動の速さを思い出させるように、とんとんと手のひらが背中を叩く。静かな声に、霄琳と呼ばれた。

「この旅を案じてくれるのは嬉しい。だが、お前の苦痛を蔑ろにはしたくない。これは俺の願いだ。何ひとつお前のせいではない」

静かな低い声が、耳に滔々と響く。それだけで霄琳の中で荒れ狂っていた恐慌が治まっていく。ぐずつと鼻をすすった。はあと吐いた息は熱かったが、吸い込んだ空気が火照った胸を冷やしてくれる。睨った目の縁からはまた雫が零れて頬を伝ったが、霄琳の胸の中は安堵に満ちていた。

「大丈夫だ、霄琳。俺がお前を守る。——そのために出会えたんだ」

飛刃で移動することを諦め、離原と霄琳は新たに買った荷馬車で出立した。荷馬車の旅はのんびりしたものだったが、快適だった。

落下の心配や恐怖がないだけではない。すべてにおいて、離原が甲斐甲斐しく世話をしてくれるからだ。

半胡を出て三日、今日も野宿になったが、荷馬車の中には道中の村で買った布団があるし、食べ物や飲み物だって積まれている。ここにしようと思えば離原が馬車を停めたのが深い山中でも、霄琳に異存はなかった。

離原は馬から降りると、符を手にして周囲を飛び回り始める。荷車に乗ったまま、霄琳はその光景に目を凝らした。

初めて野宿をした日に教えてもらったそれは、侵入者を察知するための禁衛条きんゑいじょうという術の符だと聞いていた。

「侵入者を察知するための術だ。符と符の間を何かが通ればわかるようになってる。山中は獣や妖魔が出やすいからな」

その時は離原の言葉にあわてて周囲を見渡した霄琳だったが、幸いにも今日まで熊や妖魔の類に

は出くわしていなかった。

ひとしきり飛び回った離原が飛刃から降りたのを確認して、霄琳は荷車から顔を出した。

「出てもいい？」

「ああ」

のそのそと出てきた霄琳は、空を見上げた。

空中からの襲撃にも備えた形で符は配置されているらしいが、その包囲網は霄琳からは見えない。侵入者がかかったら蜘蛛の巣みたいに絡みついたりするのかなと考えていると、視界の端に枯れ木を抱えた離原が映った。

「禁衛条きんゑいじょうが気になるか？」

「うん、すごいなって。こういうのって、どうすればできるようになる？」

「修行だな。まずは大体は門派に入り、研仙になる。研仙は修行中の身だ。日々の鍛錬や修練を経て、様々な術を使うことができるようになる。それが長じれば、仙師になる」

「じゃあ、離原も修行した？」

「ああ。門派に属したことはないが、師事したことはある。あとは独学でやってきた」

「飛刃も？」

「飛刃は基礎だけ習った。あとはひたすら書物を漁って実践を繰り返しているうちにできるようになった。時間だけはあるからな」

「じゃあ他にも何かできる？」

霄琳の頭の中の仙師はあやふやな像だ。空を飛び、仙術を操って驚くようなことをする。それくらいしか想像することができない。離原は鼻を横断する傷を歪ませながら苦笑した。

「俺ができるのは飛刃を操って空を飛ぶことと、簡単な符を使うこと、衝撃波で攻撃をすることくらいだ。あとは剣術か」

そう言うのと離原は腰を上げた。

「そろそろ夕餉の準備をしよう。日が暮れてきた」

「ほんとだ……もう暗くなってきたね」

離原の言葉に、霄琳も動き出す。二人で手分けして食事の準備を終える頃には、すっかり日は落ち、森は夜陰に沈んだ。

そこかしこに人の気配や灯りがある人里と違って、山の夜は静かで深い。木々の間を移動する鳥の羽ばたきや、虫の鳴き声、かさこそと動き回る小動物の足音、時折吹き抜ける風に葉が擦れる音だけがあり、空を見上げれば美しい星が見えた。

簡単な食事を終えてぼんやりと空を見上げていると、離原がごそごと荷車をあさり、小さな墨壺と筆を出してきた。そして前にも見せてくれた地図を懷から取り出して地面に広げると、筆で印をつけ始めた。

少しの間それを見ていた霄琳は、樹に預けていた背を起こした。

「離原」

「うん？」

「教えたくなかったら言わなくていいんだけど……何か探してる？」

地面に広げられた地図には、墨で名前を消された村や町がいくつもある。ちょうど今筆で消されたのは、今日通ってきた町の名前だ。ここ数日、人里があればそこに寄り、買い物しながら何かを聞いて回っている離原を見ていた霄琳は、ずっと機会をうかがっていた。

（俺にも手伝えるかな）

馬車を操るだけでなく、旅全般において離原の世話になりっぱなしの霄琳だ。少しでも何か役に立てないかと思っていたのだ。

少しの緊張と高揚、それからわずかな不安で霄琳の声は上ずったが、離原は特に拒む様子もなく顔をあげた。

「植物を探している。絶滅していると思うが、種子や花が残っていたり、記述のある文献がないかと思って、聞いて回っている」

意外な返答に、霄琳はへえ、と声を漏らした。

「なんて植物？」

「俺たちはカケイシと呼んでいる。蔓状の植物だ」

「かけいし……」

繰り返したとたん、頭の中でパチンと水泡が弾けたような感覚があった。

「ああ、カケイシ……霄琳？」

すぐ隣にいるはずなのに、離原の声はどこか遠くに聞こえる。地図を見ているはずなのに、霄琳

の視界に広がるのは違う光景だ。

（なんだっけ、かけいし……花？ 花園があつて……書庫の卓子の……）

今まで頭の中になかったはずの映像がどつと押し寄せる。

美しい花園、書庫に置かれた卓子の瀟洒な飾り彫り、山査子^{さんざし}飴を差し出す手、誰かが呼ぶ声——
「霄琳！」

「——あ、っ……」

大きな声に、体が震える。一瞬どこにいるかわからなくなり、両肩がやけに痛んだ。はつと目を見開くと、険しい顔の離原が霄琳の両肩を握りつぶさんばかりに掴んでいた。

「いつ……いた、痛い、なにっ？」

思わず悲鳴をあげると、離原ははつとしたように手を緩めたが、その表情はまだ焦りを含んでいた。

「あ、ああ——すまない、大丈夫か？ 俺が誰かわかるか？」

「誰って」

離原だと言おうとした瞬間だった。

バリンと薄く硬いものが砕け散る音がして、体が大きく揺さぶられた。気付けば霄琳は地面に転がり、その上に離原が覆いかぶさっていた。

「——なっ」

悲鳴をあげるより先に跳ね起きた離原が素早く剣を抜いた。転がったままの霄琳の頭上で、金属

が激しくぶつかる音が響く。

あわてて起き上がった霄琳は、月明かりを背負って離原と鏑迫っている男を見上げた。黒尽くめの隙間から覗く目に、背中がざつと総毛立つ。

「黒衣……！」

喉がひゅつと嫌な音を立てた。黒衣の目は立ち上がった霄琳を射貫くように見つめていて、その間に離原がいることなど忘れているようですらある。だが、それも長くは続かなかった。

離原が一步踏み出し、同時に剣を振り上げる。刃同士がせめぎ合う鋭い音は耳が痛くなるほどで、霄琳は気圧されてじりじりと後ずさった。

「白霄琳！ 花鉦が見えたぞ、やはり鈴祇^{れいし}か！」

怒号を聞いたとたん、体の震えが止まらなくなった。

あの声はだめだ。怖い。

ふらふらと揺らいた脚は、耐え切れずに踵を返して駆け出した。

「待て、白霄琳！ 今度こそお前を……!!」

「行かせるか！」

刃が打ち合う音が静かな夜の森に響き渡る。

声に追われるように走り続け、ようやく霄琳が止まったのは蹴つまずいて転んだからだった。

「はっ、はあっ、はあ……っ」

胸が焼けるように熱いの、ぜいぜいと荒い呼吸を繰り返す喉に滑り込んでくる夜の空気は冷た

い。あつという間に渴いた喉で必死になって唾を飲みこみながら立ち上がった霄琳は、ゆっくりと背後を振り返った。

劍戟は聞こえない。その静けさがなおさら不気味だったが、霄琳の頭の中を占めていたのは、投げつけられた聞きなれない言葉だった。

(鈴祇？ 俺のことを言ってた？)

知らない言葉だ。それなのに胸がざわつく。

「どこか……」

不安に駆られ、霄琳は周囲を見渡した。洞窟か、せめて樹のウロにでも隠れたい。転んだ時にひねったらしい右脚を引きずりながら歩いていると、不意にがざりと音がした。

風に吹かれた葉が立てる音ではない。草を分けて、誰かが歩き回っている音だ。

黒衣か、離原か。まばらな月明かりだけが頼りの樹々の奥を見つめながら身構えていると、影がゆらりと夜闇の中から現れた。

(……獣じゃない。でも、離原なら俺を呼ぶはず……)

近づいてくる影は、声もあげなければ刃を振りかざして襲ってくる様子もない。とつさに霄琳は腰帯に手をやった。指先に触れるのは、半胡で離原に買ってもらった小剣だ。引き抜く時が来てしまったと思いながら目を凝らそうとしたとたん、霄琳はびくりと肩を揺らした。

ゆらゆらと心もとなかった影の動きが唐突に早く、明確に霄琳を目指し始めた。

「——ひっ」

たまらず霄琳は駆け出した。大きく体を揺らしながら近づく影の背後から、同じような影がいくつも続いてくるのが見えたからだ。

(なにあれ、なにあれ!?)

駆け出す寸前、霄琳は闇の向こうから近づく者の輪郭をはっきりと捉えた。あれは離原でも黒衣でもない。人でもなかった。

逃げる霄琳の背後を、音は決して離れずに追いかけてくる。時折フオーウとくぐもった鳥の鳴き声のような声がいくつもこだまして、それが気味の悪さを引き立てた。

「う、ぐっ……」

右脚は限界だった。熱を持ってじんじんと痛み、足先を地面につけるだけで響く。樹々を伝うようにしながらも逃げていた霄琳だが、とうとう動けなくなってしまった。

鳴き声がどんどん近くなる。やがて距離が詰められ、まばらな月明かりの中に浮かび上がった姿に、霄琳は絶句した。

猪の頭を細く伸ばしたような顔に人の体。口からは赤黒い長い舌をぶら下げている。その先端から粘度の高い雫をだらりと落としながら、異形は嗤うようにまた鳴いた。

「ひっ……うわっ、わっ」

思わず悲鳴をあげて退こうとした霄琳だったが、その瞬間、限界を訴える右脚の激痛にもんどりうって転がった。あわてて体を起こした時には、目の前に三体の異形がいた。

異形たちの口からはガチガチと音がする。腐った血肉のような臭いが鼻先をかすめて、えづきそ

うになりながらも霄琳は腰の小剣を引き抜いた。

武術の心得などないが、これで怯んでくれたらいい。しかしそんな願いもむなしく、鞭のようになった異形の腕が剣を弾き飛ばし、つられて霄琳も地面に転がった。

「うつ……」

抵抗はあつてなく終わり、もう武器さえない。くじいた足の痛みも強く、立ち上がることさえできない。それでも草の合間に転がった剣を取ろうと這いつくばったまま手を伸ばした霄琳は、異変に気付いて目を丸くした。

「成長してる……？」

霄琳の手の甲には、今も消えずに花鈿がある。それが明らかに成長していた。植物の種のような模様だけだったが、それを起点に伸びた蔓が手首に巻き付くような絵柄になっている。

白い手の甲できらきらと輝く花鈿を見つめて一瞬だけ惚けた霄琳は、恐怖も忘れて綺麗だと思った。

しかしそんな感想を抱いたのもつかの間、異形たちが草を踏んだ音で我に返った霄琳がぐつと伸び上がって剣を掴んだとたん、しなる異形の腕が再び繰り出された。

剣を握り締め、とっさに目をつぶる。しかし異形の指が届くより先に、霄琳の喉は引き攣った悲鳴をあげた。

「うああっ！ 痛い、痛い痛いあああ……っ！」

花鈿の浮き上がる両腕に、突如耐えがたいほどの激痛が走った。視界が揺れるほどの痛みはひど

く、吐き気さえこみ上げてくる。そんな中、生理的に溢れた涙で揺らぐ視界は、突然現れて縦横無尽にのたうつ銀の蔓でいっぱいになっていた。

うねうねと動き回る蔓は夜闇にも輝くまばゆいもので、それらは霄琳と異形の間に壁を作っている。まるで籠を編むように交差していく隙間を伸びた舌が搔い潜ろうとしたが、察知したように一瞬で編み目が密集し、その空隙は塞がれた。

「フオオアアア!!」

蔓の壁の向こうで、異形たちは怒りの声をあげている。だが、それに構う余裕もなく痛みで震える霄琳は、ぼろぼろと零れる涙の向こうに信じられないものを見て呆然とした。

霄琳を取り巻き、球状になろうとしている銀の蔓の源流は、霄琳の手の甲にある花鈿だった。

（なに？ なんて？）

混乱と痛みに泣き呻く間にも、銀の蔓はすると動き回る。やがてそれは球体を成し、霄琳はその中に閉じ込められた。

外ではまだ異形が騒いでいる。銀の蔓で作られた球体を攻撃しているのか、ガリガリと引つ搔く音や何かを叩きつける音もする。

「うつ、ああっ……、ぐ……っ」

両腕が痛くてたまらない。それでもこの蔓の壁が破られてしまえば、あの異形の餌食になる。それだけは嫌だと、取り落とした小剣をふたたび握り締めた霄琳の耳に、激しい音が響いた。

ザツと風を切るような音がしたかと思うと、異形たちの悲鳴があがった。固いものを切るような

音も聞こえる。

蔓の壁を隔てた向こうで何が起きているのかわからず、霄琳は小剣を握ったまま胸を喘がせた。ここで気を抜いてはだめだと壁の向こうを睨みつけた霄琳だったが、その向こうから響いた声に、詰めていた息を吐いた。

「霄琳、この中にいるのか？ 無事か？」

荒い呼吸の合間に霄琳を呼ぶのは、離原の声だ。気が抜けて思わずぼうっとしてしまった霄琳だが、壁を外から軽く叩かれて、はっと我に返った。

「い、いる、中にいるよ！ 怪我はないけど、足を捻ったみたいで……」

とつさに声を張り上げると、壁の向こうの離原がはっと息をつくのが聞こえた。

「出てこれるか？ 俺の剣でもこれは切れない」

「待って、中から……」

切ってみるのはどうか、と小剣を振りかざした霄琳は、ふと気付いて腕を下ろした。

花鈿はまだ手の甲にあり、模様も手首まで伸びたままだ。しかし蔓はなくなり、いつの間にかあれほどひどかった痛みも消えている。

どうしてと思った矢先、不意に頭上から降り注いだ輝きに上を向いた。

見ると、球体を形作る銀の蔓がまるで霧雨のようになって崩れていく。さらさらとした銀色の輝きは夜闇に溶け消え、やがて座り込んだ霄琳だけが残された。

「霄琳……今消えたものは……」

静まり返った中に、離原の呟きが落ちる。その手にはどす黒い何かを拭った跡のある剣が握られていた。

「わ……わかんない。でもこれ、俺の手から……この花鈿から出て……」

信じてはもらえないだろうと焦って霄琳は言ったが、離原は否定も疑いもしなかった。

ただどこか苦しげに眉を寄せ、歯を食いしばっているようだった。

座り込んだままの霄琳に歩み寄った離原は傳くように膝をつき、霄琳を抱きしめた。

「……やはり、お前は鈴祇なんだな……」

（また、鈴祇……）

何もかもがわからない。手の甲にある花鈿の正体も、銀の蔓が出たきっかけも、ひどい痛みも、鈴祇と呼ばれることも。ただただ謎が増え、自分がわからなくなっていく。

霄琳の肩口に、離原の顔が埋まる。その体温はなぜか懐かしく思えるもののに、不安でたまらなかつた。

自分で足をかけて乗るのではなく、抱き上げられての移動なら耐えられるかもしれないと思った霄琳だが、やはり飛刃での移動に耐えることはできなかった。

恐怖はもちろんあったし、浮き上がったとわかった時は悲鳴も出た。けれど背中に戻された腕は霄琳がしがみつくより強く抱きしめてくれていた。だから大丈夫だと思ったが、恐怖のせいなのか、

それとも自分で立てないほど疲弊していたせいなのか、気付けば街中に降り立っていた。

「ごめん、俺また……」

「気にするな。それに、それほど飛んでいない」

「ここは？」

「定英という街だ。ここが一番近かった」

すっかり夜も更けているため、小さな街には至る所に提灯の灯りがともっている。離原はすぐ近くにあった宿の門をくぐった。

「二人だが、部屋は空いてるか。怪我人がいるんだ、休ませたい」

酒場が併設されているその宿は、もう遅い時間ながらそこそこ賑わっている。喧騒の中を縫って出てきた番頭に声をかけると、帳簿をめくった男はううん、と唸った。

「一人用の部屋しか空いてねえな。そこでも良いってんなら、上掛けくらいはもう一枚出すよ」

「そこでいい。それから、包帯と打ち身か捻挫に効く軟膏がほしい」

「包帯と軟膏？ 揃えることはできるが、もう夜だ。明日届けるつてのは……」

「今ほしい」

宿賃も含めてこれで、と離原は銭貨を置いた。馬も荷も森に残してきてしまったが、金だけは持ってきていたらしい。台にコトンと置かれた金色の輝きには番頭だけでなく霄琳まで目を見開いた。

「いつ、急いで揃えさせていただきます。他に何かご入用のものは？ お部屋も他を移動させれば

どうか……」

「部屋はそのままでもいい。急いでくれ」

かしこまりましたと声を張り上げた番頭は呼び寄せた店員に離原たちの案内を頼み、あわただしく店を出て行った。

店員の先導で部屋へ向かった離原は、通された一室の寝台に霄琳を下ろすと戸口で立ったままの店員を振り返った。

「足を洗いたい。水と手拭いをもらえるか」

「はい、ただいま」

腰に剣を佩いたまま店員に言付ける離原は、店員が去るとすぐに霄琳の前に膝をついた。

「足を診よう。まだ痛むか？」

「少し」

熱を持ってじんじんと疼くが、挫いた時ほどひどい痛みではない。だが離原は慎重に長靴から霄琳の足を抜くと、靴下も取り去った。

「……腫れてるな。骨は折れていないようだ」

離原は霄琳の裸足を丁寧に観察する。なんだか恥ずかしくて、霄琳は診られていない方の脚を軽くぶらつかせた。

「さつきよりはだいぶ良くなってよ」

痛みが強かったのは、挫いた直後に走ったりしたせいだろう。思ったよりひどい怪我ではなかつ

たようだと言琳は樂觀的だが、離原は神妙な面持ちで赤らんだ足首を見つめていた。

「……他に、怪我は」

「手のひらをちよつと擦ったくらいかな。すぐ治ると思う」

ほらと開いて見せた両手のひらには擦り傷があるが、うっすらと血がにじむ程度で、大したものではない。大丈夫だと安心してもらえるかと思つたのに、離原の顔はさらに険しくなり、眉間にはうっすらと皺まで寄つた。

「お客様、御用命のものををお持ちしました」

なんでそんな顔を、と思つた言琳が手を引つ込めかけた時だつた。扉の向こうから声があがり、離原が応じると、さつき店を飛び出していつた番頭が顔を出した。手に持つた盆には包帯が二巻と薬包がいくつか載つており、後ろには水桶と手拭い、それから薄い上掛けを携えた店員もいた。

「ここに」

卓子を指す離原は堂々としている。人へ命令を下すことに慣れている仕草で、今更ながら言琳は彼の身分どころか名前しか知らないのだと思つた。

（着ているものも上等なものだし、お金もたくさん持つてる。偉い人だったりする？）

さつきだつて、離原が番頭に渡したのは金貨だ。番頭が目の色を変えるのも無理はない。

飛刃を使いこなす仙師だし、もしかしたら国の要職にでも就いているのかもしれない。

そんな風に言琳が考えているうちに番頭と店員は愛想笑いを浮かべながらそそくさと出て行き、袖をまくつた離原は水桶を床に置いた。

「まずは手を拭こう。痛ければ言つてくれ」

「えつ、自分でできるよ」

傷はあるが、痛んで仕方ないというほどでもない。それなのに伸びてきた大きな手は言琳の手を捕まえると、丁寧に拭い始めた。

くすぐつたいし、なんだか恥ずかしい気もする。だが離原の顔は真剣で、少しでも茶化してはいけないような気がした。

言琳が黙っていると、ぽつりと小さな声が部屋に響いた。

「すまない、俺の警戒が甘かつたせいだ。痛かつただろう」

「そんなことないよ、むしろ離原は俺を助けてくれたんだから。怪我也、俺が転んだせいだし」
黒衣の急襲も、妖魔と出くわしたのも予期せぬ事態でしかない。何ひとつ離原のせいではないし、命も落とさず、怪我也軽傷で済んだのだ。むしろ幸運だとさえ言琳は思つた。

だが離原はそうは思っていないようで、指の間を拭きながら首を振つた。

「いや、俺の気の緩みが招いた失態だ。今度からはもっと強固なものにする。……もう繰り返さない」

「離原……」

言琳に告げているというよりは、自らに言い聞かせるように呟いた離原は、それからくもくと言琳の両手を拭き清めると、足も同じように拭き、手早く処置をしてくれた。

薬包に包まれた粉を水で軽く練り、腫れた患部に塗る。それから最後に包帯を巻きつけ、動かな

いように固定していく。手慣れた様子に思わず見入っているうちに処置は終わり、ようやく霄琳の足は解放された。

「一応固定したが、痛みがひどくなるようなら言ってくれ。巻き直す」

「うん、ありがとう」

足首の痛みはかなり軽くなっている。これなら明日は歩けそうだと考えていると、離原は部屋に一つしかない椅子を引き寄せて霄琳の前に腰かけた。

もう夜も遅い。月は中天を越えようとしているし、窓から見える街もすっかり灯りを落としている。霄琳も眠くなってきたくびが出そうになったが、離原が突然口を開いたので、それも引っ込んだ。

「花鉦が成長した時、痛みはあったか」

「なかったよ。だから、いつ成長したのかもわからなくて……」

両手の甲を離原に向けると、下からすくうように取られ、それからくりとひっくり返された。手の甲から伸びた蔓の絵柄は、手首の内側で交差して美しい紋様を描いている。それは、薄暗い中でもわずかに光っていた。

「でも、もしかしたら黒衣が来た時にはこうだったのかも。花鉦が見えてるぞって言ってたから」あの時の絶叫は、まだ耳に残っている。ふと不安になって窓の外を見たが、夜闇が広がっているばかりだ。

ぼつんぼつんとわずかな灯りが所々に見えるだけの夜の風景。それを眺めて、霄琳は自分の記憶

のようだと思った。

霄琳がわかつていることは、自分に殺意を向けている人間がいるということと、手の甲にある花鉦は刺青などではないということだ。他は何もかもを忘れている。離原のことさえ、霄琳は何もわからない。

「……ねえ、離原。俺、何を忘れてるの？」

離原と出会って、まだたった数日だ。それでも多くのことを忘れていることを知った。だからこそ思い出さなければいけないとは思っていたし、そうでなければこれから先どうするかも決められない。

けれど怖かった。

命を狙われる理由があつて、それを自分は忘れてしまっている。それだけじゃない。夢で見た花園も、華やかな街も、霄琳は懐かしいと思った。あれは眠りの淵で見るあやふやな世界ではない。きっと、過去に見た景色だ。その中にいた男も——離原も、霄琳は知っているはずだ。

それらが一気に戻った時、目の前に広がる現実はどう色を変えるのだろう。今はぼつかりと空いている記憶の穴が塞がった時、そこに現れる真実が怖かった。

「教えて、離原」

すべてを知らなくても、きっと霄琳よりは知っているはずだ。斜面を転がる雪玉がどんどん大きくなるように、言葉に出してしまえば途方もなく増大していく不安。それから逃げるすべを問うように、霄琳は自分を守ると言ってくれた男を見上げた。

離原は持ったままだった霄琳の手を下ろすと、一度深く深呼吸をした。

「……長くなる。それでもいいか」

ゆっくりと頷いた霄琳の肩に、冷えるからと離原は上掛けをかけてくれた。

四

「……五百年前の話だ」

そう言った離原に、霄琳は少なからず驚いた。けれど早々に話の腰を折るわけにもいかない。開きかけた口をあわてて閉じた。

「この国に、長命を願う皇帝がいた。この皇帝は貪欲で、仙師になれば百を超えても生きると言われているのに、それでも足りないと思っていた」

「仙師って百年も生きるの？」

「仙師ならば大体二百までは生きる。だが、皇帝はその上、神仙になりたかった。神仙になれば、寿命は千年以上とも言われている」

「千年……」

人間など、生きてもせいぜい七十歳で長老だ。百歳でも十分に驚きなのに、千年と言われて、その膨大な時間に霄琳は絶句した。

「皇帝は永久^{とわ}の生命をほしていた。だが、修行の身である研仙にはなれても、仙師、ひいては神仙になるには素養も長い修行も必要。もっと手っ取り早い方法はないかと文献を調べた皇帝は、特別な桃の存在を知った」

「桃？」

桃は確かに吉祥の果実と言われるが、どこにでも売っている。思わずぽかんと口を開けた霄琳に、離原は少し笑った。

「ただの桃じゃない。天仙界にある天帝の庭に生える、特別な仙桃だ。天帝をはじめとする神仙たちはこれを食して高い仙力を得ていると文献にはあった。だが、禍告嘆鈴が鳴り響いた時と、十年に一度の訪礼祭しかこちらから庭に入るすべはない」

「ちよつと待って、禍告嘆鈴ってなに？」

離原は滔々と語ってくれるが、霄琳は話に追いつくのが精一杯だ。

すかさず飛んできた問いに、離原はすまないと頭を掻いた。

「禍告嘆鈴は、大災洞が開いた時に鳴り響くとされている大鈴だ。禍告嘆鈴が鳴れば、天仙界が人界を救う手助けをしてくれる」

「大災洞？」

わからないことばかりだ。本当に以前の自分はこれらの言葉を理解していたのだろうかと思しながら、霄琳は新しく増えた単語に眉を寄せた。

「大災洞は……そうだな、わかりやすく言えば穴だ。妖魔が出てくる穴。この世には、色んな所に綻びがあつて、妖魔はそこから出てくる。これを災洞という」

「俺が会った、あの……なんか頭が細い猪みたいいやつもそこから？」

「そうだ。あれは野狗子で、戦の跡地に出たりするやつだ。人間の脳をずする」

「脳……っ」

思わず自分で自分を抱きしめた。あの時、わけもわからないながら銀の蔓で守られたが、あれがなかったらと考えると今更耳の辺りがぞわりとした。

「あいつらも災洞から出てきたんだろう。そういつた穴はどこかで勝手に開いて、またすぐ閉じる。だが数十年に一度、大穴が開く。これが大災洞だ。大災洞は勝手に閉じないうえ、大物が出てくる」

野狗子ですら怖ろしかったのに、それを越えるようなものが現れるなど、聞いただけで鳥肌が立った。

「わ、わかった。続き、教えて」

これ以上聞いていては話がそれるし、更に恐ろしいことを言われそうだ。霄琳が続きを促すと、離原は五百年前の皇帝の話を再開した。

「大災洞が開いた時は禍告嘆鈴が鳴り、仙界から大災洞を閉じる助力を得られる。そのことに對する礼を尽くし、忘れないために行われるのが訪礼祭だ。皇帝はそれを待つことにした」

「大災洞はいつ開くかわからないけど、訪礼祭はいつやるか決まってるからか」

「そうだ。同時に、訪礼祭に参加する夏子静という研仙に目をつけた。彼が飛刃の名手だったからだ。皇帝は夏子静に、天帝の庭が開いたら仙桃を採ってくるように命じ、夏子静は訪礼祭の日に仙桃を盗んだ。だが、その時に誤って禍告嘆鈴を壊してしまった」

「……っ」

不意にどくんと、鼓動が大きく跳ねた。ほんの一瞬めまいもしたが、瞬きの間にそれはなくなっていた。

(なに?)

思わず胸にそっと手をやるが、鼓動は落ち着いている。息苦しさや違和感もなかった。

「そのまま夏子静は皇帝のもとへ……霄琳?」

「ううん、なんでもない」

疲れのせいだと片付けて首を振ると、離原は怪訝な顔をしたが、特に何も言うことなく、話を続けた。

「夏子静は皇帝の元へ急ぎ、受け取った皇帝は仙桃を食べた。そこへ天帝の率いる神仙たちがやってきて、皇帝と夏子静は捕らわれた。二人は裁かれ、それぞれに罰を与えられた。皇帝は禍告嘆鈴が再び戻るまで老いず死なない不老不死となり、胸には呪紋が刻まれた。もし国が乱れば、呪紋は体中へ広がっていく。この呪紋に覆われるか、もしくは玉座を捨てた時、天仙界に封じられている千獣万妖が放たれる。この国は愚かな皇帝を生み出したとしてその罪を負うことになり、ありとあらゆる植物は枯れ、神仙の加護は失せ、綻びや大災洞から溢れた妖魔が跋扈する地となる。皇帝の肉体は千々に引き裂かれ、魂は天仙界の牢獄に繋がれ、肉体に負った苦しみを千年繰り返すことになることが、奴に与えられた罰だった」

離原の口調は淡々としている。けれどわずかに眉の間が寄り、視線が下がった。

「……夏子静へ下された罰は、壊れて砕けた禍告嘆鈴のかけらの回収だった。七つに砕けたうちの

一つはそのまま夏子静に宿ったが、残りはすべて人界に散らばった。そして夏子静には、何度も生まれ変わり、大災洞が開くたびに現れる禍告嘆鈴のかけらを身に宿すことが命じられた。大災洞が閉じた時からは回収され、もともとあった天仙界の庭に返されて修復される」

「じゃあ、皇帝は生き続ける呪いで、夏子静さんは何度も死ぬ呪い?」

「そうとも言えるな。皇帝は今も生き続けているが、何度も生まれ変わってくる夏子静の名前はそれぞれ違う。だから総称して鈴祇と呼ぶようになったんだ」

「……でも、俺も鈴祇なら夏子静さんの生まれ変わりで、……それなら俺は、罪人?」

話を聞いた限り、夏子静は命令とはいえ、国にまで災禍が及ぶ呪いがかけられる発端を担った人物だ。その生まれ変わりなら、自分も罪人だったのかと呟いた霄琳に、離原はすかさず違うと言った。

「夏子静や鈴祇たちは巻き込まれたに過ぎない。もしなじる声があるとすれば、その非難はすべて皇帝に向けられるべきだ。それに、鈴祇は人々を守る力がある。現にこれまでも、大災が起ころたに鈴祇は民を守ってきた。尊ばれこそすれ、罪人と謗^そられていい存在ではない」

「守る? でも俺に、そんな力は……」

ない、と言いかけて、霄琳は自分の手の甲を鮮やかに彩る花鈿を見た。

妖魔に襲われた時、この花鈿からは銀の蔓が出て丸い籠を作った。霄琳はその中に閉じ込められ、結果として被害に遭うこともなかった。霄琳が意図してやったことではないが、視線をあげると、離原が頷いた。

「花鈿こそ鈴祇の証だ。大災洞の予兆が現れ始めると、花鈿が鈴祇の体に現れる」

「じゃあ、俺の体に花鈿があるってことは、大災洞が開くってこと？」

「そうだ。大災洞が開いた時、花鈿は成長を終える。鈴祇は花鈿の力で人々を守り、神仙たちは禍告嘆鈴のかげらの音を聞いて人界に下りる。そして大災洞が封印され、大災は終わる。……だが本来は、その力は——あの銀の鳶は、大災洞が開いた時にのみ現れるはずなんだ。霄琳、どうやってあの力を使った？」

「どうやって……わからない、気付いたら蔓が生えて……」

あの時、霄琳はただただ苦痛に泣いていただけだ。銀の蔓が自分の手から生えたことなど、いまだに信じられないほどののだ。

（何もわからない……でも、前の俺は全部わかったのかな）

離原の話にしてもそうだ。花鈿を持ち、銀の蔓を操るのが鈴祇だと言われても、罪を償うために生まれ変わっているのだと教えられても、何ひとつ覚えがない。

黙り込んだ霄琳がしばらく考えこんでいると、ジツと音がして、部屋に置いていた灯りが消えた。どうやら芯が燃え尽きたようだ。立ち上がった離原が油皿の様子を確認したが、嘆息して元の場所に戻した。

「……一気に詰め込んでも、混乱するだけだ。ちょうど油も尽きた。今日はもう休んで、明日の立に備えよう」

「うん……そうだね」

確かに、霄琳の頭の中は混乱の一途を辿るばかりだ。明日にはまた旅立つのだし、夜ももう遅い。休むなら寝台を譲ろうと思った霄琳は、離原が部屋の隅に座り込んだことに瞬きをした。

「離原、俺が床で寝るよ」

「いや、ここでもいい。上掛けもあるから大丈夫だ」

離原は横になるつもりがないのか、壁に背を預けている。手には剣を握って、むしろ休む気さえないように見えた。

「でも、そこじゃ休まらないよ。いいから寝台で寝て」

「お前こそ足の捻挫がある。床で寝れば体に障る」

頑として聞かない様子の離原だが、霄琳もここで折れたくはない。何もできない分、せめて寝台を譲る程度のことではしたかったし、黒衣の急襲や飛刃での移動もあったのだ。疲れているはずの離原を労わりたかった。

だが、離原は霄琳こそ寝台で寝ろと言う。ならばと霄琳は寝台の端に寄った。壁に背中がぴったりにくつくほどだ。そうすれば、狭いながらも人が一人横たわれるぎりぎりの空間ができた。

「じゃあ俺、寝台で寝る。だから離原もここ来て」

「……」

野宿をする時は荷馬車で雑魚寝をしていたのだ。それよりも少し狭いが、寝れないことはない。少なくとも、硬い床の上に座ったまま眠るよりはいいはずだ。

「早く」

離原が来てくれないければ上掛けもかけられない。そうこうしている間に寝落ちてしまいそうだ。ここ、と寝台を叩くと、離原はため息をついてようやく寝台に上がってきた。

上掛けに丸まると、その上から更に一枚、離原がかぶったものの半分をかけられる。そうすると一気に温かくなって、霄琳の意識はあつという間にほどけ始めた。

「……霄琳」

「う、ん……」

離原が呼んでいることはわかった。目を開けなければと思うのに、回ってきた腕の温もりに懐かしさを覚え、その心地よさがさらに眠気を誘う。

——そうだ。前もよく、こうやって眠った。

きつと今日はいい夢が見られる。何も怖いことなどないのだ。この腕の中にいる限り、恐ろしいことは起きない。霄琳はそう信じていた。



美しい田園風景がどこまでも広がっていた。

田んぼでは裾をからげて田植えをしている人々がいて、その脛の辺りはたつぷりと張られた水が

陽光を反射してきらきらと輝いていた。

あぜ道を子どもたちが走っていくが、そのうち彼らは美しい衣装をまとった女官たちになった。さらさらと裾をなびかせて歩く彼女らは霄琳の傍に来ると、後ろを歩き出した。

——ええ、ええ、もうじきお越しになりますよ。

——今日は蓮池を散策なさるのですよね。お召し物も、それに合わせましょう。

そぞろ歩きながら、彼女たちは鈴のような声で笑い合う。霄琳も楽しくなって笑うと、空を飛んでいた鳥が呼応するようにピイと鳴き、大きく羽ばたいた。すると大風が起こつて、すべてを吹き飛ばした。

けれど怖くない。すぐに強い腕が霄琳を抱き留めてくれる。

——ありがとう。

微笑んだ霄琳に、抱き留めた男も笑みを返す。

普段はまっすぐに閉ざされているが、少し口角が上がると人好きのする笑顔になる口。それから高い鼻梁。顔を大きく横断する傷痕には荒々しさを感ずるが、その上にある双眸は雄々しくも優しい光をたえている。そして、黒い筆で一閃したようにまっすぐな眉。

何度も傍で眺めた容貌が近づいて、霄琳はそっと目を閉じた。ここから先、与えられるものを知っているからだ。

降りてきた唇が合わさる瞬間、霄琳は伏せた臉を薄く震わせて呟いた。

「……離原」



新しく買いなおした荷馬車に揺られながらうとうと頭を揺らしていた霄琳は、ピーイと澄んだ鋭い鳴き声にはっとして顔をあげた。

見ると、馬の背に乗ったままの離原の腕に大きめの鳥が留まったところだった。

伝書用の鳥なのか、細い脚には筒が付いている。そこから丸まった紙を取り出しながら離原が振り返った。

「霄琳、荷物の中に黒い包みがある。干し肉が入っているから、餌をやってくれ」

「うん」

なんとなく視線を合わせづらい。それとなく視線をそらして荷物に向くと、爪の音を立てながら歩いてきた鳥が、ピーイとまた鳴いた。

「待つて……あつたあつた。はい、お疲れさま」

一つだけ取って目の前にぶら下げてやると、鋭い嘴がずっと寄った。

「怖がらないんだな」

鋭いくちばしが器用に干し肉をくわえるのを見てみると、離原が言った。

離原は、読んでいた紙面から顔をあげてじっと見つめてくる。霄琳は見られていると思うとなおさら顔をあげづらくて、ぎこちなく頷いた。

「え、えつと……ちゃんとしつけられてるから噛まないし」

「そうか」

「うん……」

妙な空気だが、この雰囲気の原因はわかっていた。

（あんな夢見たんじゃ、まともに顔見れない……）

今朝、霄琳は早く起きた。しかし心地よく爽やかな目覚めと言うにはほど遠く、衝撃と驚愕で起きたようなものだった。

起きたら忘れていたような夢だったら、幾分かよかったかもしれない。しかしあまりに生々しく現実味のある夢だった。

霄琳が見たのは、まぎれもなく離原とくちづけを交わす夢だった。

抱きかかえてくれた腕の強さや布越しの温かさ、触れた唇のやわらかさも、目覚める直前までそうしていたと錯覚するほど鮮やかだった。

そのうえ、目覚めても離原に抱えられるような形で、深く瞼を閉ざした顔が間近にあったものだから、悲鳴を飲み込むのに一苦労した。

それからはもう眠れるはずがない。

頬どころか首や耳まで熱く感じるほど赤面してしまった霄琳は、一刻も早く寝台から降りたかつ